

1967 (昭和42)

年に開催された埼玉国体で知り合った陸上競技の友人、小原俊彦先生から突然電話が来たのが88年の春。35年も古い話で恐縮だが、彼は昭和の初めにかけて、日本陸上競技界はもとより、日本女子スポーツ界の先駆者として活躍した人見絹江さんを、現代スポーツ史にとどめるための資料の収集に奔走(ほんそう)していた。電話は「人見さんら多くの名選手を育てた『幻の美吉野(みよし)の競技場』を見たいので案内してほしい」との依頼であった。

美吉野競技場とは、

幻の美吉野競技場

26 (大正15) 年、吉野町の吉野川中州を利用して建設された、当時としては画期的な400メートルトラックとスタンドを持つ公認の陸上競技場で、大阪毎日新聞運動部長の木下東作氏の要請を受けて、旧吉

ば、競技場は35 (昭和10) 年に同鉄道の経営権が近鉄に移り、資材置き場として売却されるまでの間、多くのランナーが全国から集まって練習し、全国大会も再三開かれて、数多くの日本記録もつくら

を終えた人見選手の取材とともに、彼女を指導した元100メートル日本記録保持者、谷三三五(たに・ささご)氏についても、自宅を訪問して沢山の資料や写真を収集されていた。案内役を務めていた

女子スポーツ界の原点

野鉄道の阪本仙次社長(同町平尾出身)が巨費を投じて建設されたと言われている。先生のご依頼に應えるため吉野町上市在住、陸上競技の先輩北村仙太郎氏に声掛けして案内していただいた。

北村氏の話によれ

れたという。資材置き場になるまでは、競技場としての原型をどとめていたが、59 (昭和34) 年の伊勢湾台風による氾濫で冠水し、姿を消してしまっただけらしい。

小原先生は、世界のランナーとして活躍し、24歳の若さで生涯

いただいたことが懐かしく、今も心にとどめている」と、当時を思い出して語られていたのが、まだついこの間のような気がする。

昭和の初期は、女性が運動するなんてとてもないことと白眼視された時代、日本の女性スポーツの草分けとなる活躍をした偉大な

選手が、わが奈良県吉野町の施設を拠点にしての活動、この話題は身近にありながらも知らな過ぎる話である。

人見選手が短い生涯を燃やした美吉野グラウンドには、厳しい練習の疲れを癒やしたという吉野・洞川の「こまどり」についても綴られたエピソードが手元にあり、時々目を通しては胸を熱くしている。



1926年に建設された美吉野競技場。日本の女子スポーツ界の草分け、人見絹江選手も練習に明け暮れた(筆者提供)

人見絹江選手と偉大な指導者・谷三三五コンビが明け暮れた、今は見る影もない美吉野競技場のこと、百年前に芽生えた日本女子スポーツ界の原点が、奈良の地にあるということ、当時のエピソードとともに深くここに刻んでおきたい。

第2、4土曜日掲載予定